

2020年4-6月

20200401

昨日、東大文学部西洋史研究室を中心とする「ジェンダー史勉強会」というオンライン会議（Zoom方式）を傍聴してみた（主催は八谷舞氏、主題は「男性史」で、報告は小野寺拓也氏）。以前に中央アジア学会大会をZoom傍聴したときはパソコンでつないだのに対し、今度はスマホでつないでみた。スマホはパソコンよりも画面表示が限られているので、なかなか操作が難しい。チャットなるものはどうやっていいのかまるで分からないし（これはパソコンでも同様）、マイクのオン・オフ切り替えもパソコンの場合よりも分かりにくく、大分手こずった。そうしたテクノロジー上の制約に加えて、その場の議論にどのように割り込むべきかの戸惑いも大きく、あちこちで多数の疑問や感想を思いつきつつも、発言しないままに終わった。

かみ合った議論をしにくかったのにはいくつもの理由がある。専門の違い、主たる関心の違い、世代の違い等々。世代についていうと、ほとんどの参加者が私の半分くらいの年齢のように感じられた。小野寺氏が自分がジェンダー問題に関心をいだきはじめたのは2005年頃だと発言したのを聞いて一瞬驚いたが、よく考えれば彼の世代ではそれが当然なのだろう。それに対して私は上野千鶴子と同年で、1970年代（つまり、昨日の参加者の多くがまだ生まれる前）から約40年間、ずっと彼女の作品を読み続けてきた。その過程で多くのものを吸収し、多大な影響を受けてきたが、微妙な違和感もいただき、部分的な批判めいたものを試みたりもしてきた（直接会ったのはほんの数回だが、メールなどを通じてでの意見交換は何度かあった）。

専門についていうと、私は歴史学と政治学の狭間のようなところで仕事をしてきたが、社会学にもかなり関心があり、特にジェンダー論については社会学者（上野が代表的だが、それ以外にも多数）の影響が大きく、歴史畑でのジェンダー論についてはそれほど通じていないので、もっぱら歴史学という枠を前提にした議論には多少の違和感があった。

当日出されたたくさんの論点のうち、私にとって特に関心を引くものをざっと列挙するならば、いま触れた社会学と歴史学の関係に始まって、典型的な女性／男性像と非典型的なものへの着目、マクロの観点とミクロの観点、女性から見たジェンダー論と男性から見たジェンダー論の非対称性、ジェンダーとナショナリズムの関係、構築主義の意義と限界、アカデミックな研究と研究者の立場性の問題等々、多岐にわたる。私は長いことこれらの問題について考え続け、不十分ながらある程度私見を提起したりしてきた。拙著『民族とネイション』（岩波新書）、『ナショナリズムの受け止め方』（三元社）、また江原由美子編『フェミニズムとリベラリズム』（勁草書房）への寄稿などである。もちろん、まだまだ不十分であり、今後も考え続けていかねばならない。昨日は討論そのものに参加することはできず、あちこちでニヤミスを感じるにとどまったが、いつかそのうち機会を得てじっくりと議論することができればよいがと願う。

20200406

オンライン授業と著作権。

詳しい事情は知らないが、オンライン授業が急速に増えようとしている中で、教材を迅速にオンラインで提供するために著作権の制約を一時的に弱めるという動きがあるらしい。私は常日頃、著作権が強すぎるのはあまりよくないと思うのだが、著作者の印税収入は別として、出版社への補償はどういう風に考えられているのだろうか。

大学教師がある本を教科書ないし参考書として指定しても、その本を実際に買う学生は受講者のうちの一部だけだろうが、それでも何冊かは売れるだろう。ところが、授業の最初からオンラインで配られてしまうと、本を買う受講生はほとんどいなくなってしまうかもしれない。大学の教材にもいろんな種類があるが、わりと専門性の高い本だと、1000部も刷られれば御の字で、売り上げは年間数百部が目標というものも多い。それが、あちこちの大学で100人単位の学生に無料配布されてしまったら、そうした本の出版は成り立たなくなってしまうおそれがある。学術出版に携わる小規模出版社は廃業に追い込まれるかもしれない。われわれ研究者は金のために本を書くわけではないから、自分の印税は返上してもよいが、学術出版社が次々と倒産することだけは、何としてでも食い止めねばならないのではないのか。

ひょっとしたら、こういうことについては然るべき人たちが考えて、それなりの対応がなされようとしているのかもしれない。それならそれでよいのだが、これまでのところ私の目に触れる限りでは、大学教師たちが制限緩和を歓迎する声ばかりが目立ち、学術出版社をどのようにして守るかという話はほとんど聞かない。

ここに書いたことが杞憂であることを切に祈る。

20200409

少し前に、『三島由紀夫 vs 東大全共闘』なる映画がかなりの話題になったようだ（緊急事態宣言のあおりで、多くの映画館も休業になるようだが）。この討論会が開かれた当時、私は東大教養学部の学生だったから、それ自体はもちろん知っていたが、「なんか変わった企画を立てる連中がいるんだな」といった程度の感想しかいだかず、見に行こうという気も起きなかった。その数年後に東大に入学した清水靖久は近著で、この討論会を主催したのは「駒場共闘焚祭委員会と称する一握りの学生」だと指摘し、東大全共闘と紛らわしい名称を用いたのは「詐称」だとしている。この「焚祭委員会」の構成員は一人だけ、あるいはせいぜい「七、八人」だと当事者自身が認めたということも紹介されている。続けて、「東大全共闘を詐称した興行的な学生集団に幻惑されるマス・メディアは今日まで絶えない」（これは今回の映画ができるよりも前の指摘）とも書かれている（『丸山真男と戦後民主主義』北海道大学出版会、2019年、281, 314ページ）。

狭義の事実経過については、おそらく清水のいう通りだろう。もっとも、主催者がほんの数人だけの小グループだったとしても、その催しに結構たくさんの人たちが集まったというのもまた事実である。その中には、全共闘運動にはあまり積極的でないが、とにかく有名人たる三島の顔を見てみたいという人もかなり含まれただろう。そうした人たちが全共闘を代表しているとは言えないが、かといって何の縁もなかったと言い切れるかは微妙である。もともと全共闘運動は極度に多様な要素からなっていたことを思えば、こうした催しに強い関心をいだいた人たちもいれば、そうでない人たちもいたわけで、そのどちらが代表的かということを書き争っても仕方ないのかもしれない。いずれにせよ、もともと

の現象が極度に多面的だった上に、長い歳月を経て、当時のことをよく知らない人たちが圧倒的多数派になったばかりか、かつてある程度関わっても忘れてしまったような人も増えている中で、過去をどのように再構築するか／できるかは、非常に複雑な問題だということを感じずにはいられない。

20200413

昨今の情勢の中で、カミュの『ペスト』を思い起こす人が増えているようだ。私がこの小説を読んだのは今から何十年も前のことだった（その記憶がまだ鮮明だった時期に、東京大学出版会の雑誌『UP』1992年4月号の「東大教師が新入生にすすめる本」にこれを挙げたことがある）。長い歳月を経た今となつては、記憶が大分おぼろげになっているが、漠然たる思い出として、この作品は読む人に希望と励ましを与える本だという印象が残っている。ものすごい災厄を扱った本からそういう印象を受け取るのはやや変わっているかもしれないが、とにかく私はそういう風を感じた。やや敷衍するなら、人間はポジティブな目標のために団結することはできない——しいて団結を生み出そうとするなら、多くの場合、上からの動員や統制によることになってしまう——が、圧倒的にネガティブな現実を前にしたときには、何とかしてそこから脱出しようと皆が力を合わせるというようなイメージが小説から浮かんだ。ペストが広がる前には互いにいがみ合っていた人たちも、それまでの行きがかりを捨てて協力し合うといった感じの情景に強い印象を受けた。

それから数十年の間に、2011年の3・11をはじめとして様々な災厄に出会ってきたが、そうした出来事の中で、自発的連帯や相互扶助精神の発揮に感銘する一方、災厄につけ込んで犯罪やデマに走る人々や、これを政治的に利用する動きなどを見て心が暗くなることもあり、カミュ的な見方——というよりも、かつて私がカミュに読み込んだもの——はやや甘かったのではないかという気もしてきた。今回の場合も、感染拡大防止や人命救助のために献身的に尽くしている実務家たちや事態の分析のために冷静な議論を展開している専門家たちに励まされる一方、心ない言動をさらけ出す人たちや危機状況を権力闘争やイデオロギー的論争の手段として利用する動きもあるように思われ、気分が揺れる。この二つの傾向のうちどちらが優勢になるのだろうか。第三者的にいえば両方の可能性があるということになるが、現に渦中にある者としては、なるべく希望と励ましを与える側面を見出して自他を鼓舞していく必要があるように思う。もちろん、暗い側面を見落としてよいということではないが、それは努めて冷静な分析を伴うべきであり、怒りや絶望といった感情に支配されるなら、そのこと自体が事態をよりいっそう暗くさせてしまうおそれがある。「ウォーム・ハートとクール・ヘッド」という言葉があるが、それになぞらえていえば、希望と励ましを与える情報は心で、暗い側面を伝える情報は頭で受け止めるということだろうか。

20200422

「家貧しくして、孝子顕わる（または、孝子出ず）」という古めかしい言い回しがある。この言葉は近年ほとんど聞くことがなく、私自身も半ば忘れかけていたが、昨今の情勢の中で突然、頭に浮かんできた。現在の日本は「政治が貧しい」と言わざるを得ない状況にあるが、そのなかで、かなり多くの人たちが奮闘して、かろうじて情勢の更なる悪化を食

い止めている。もっとも、「孝子」とは言いがたいような人たちもたくさんいるし、先行きは予断を許さない。それでも、かなりの数の「孝子」がいるおかげで、何とかまあまあしのぐことができているような気がする。政治が貧しいのは不幸だが、「孝子頭わる」と（留保付きながらも）言えそうなのは不幸中の幸いかもしれない。

20200510

平田勝『未完の時代——1960年代の記録』（花伝社、2020年）という本を読んだ。

本書の著者は1941年生まれで、1960年代を通じて日本共産党＝民青系の学生運動に従事していた（留年を繰り返して69年まで東大に在籍）。民青系全学連の委員長になったこともあり、1968-69年には共産党本部からの指名で東大闘争収拾（ストライキ解除）の指導を託されたという。私は比較的最近まで、わずかな例外を除き民青系の人たちとの接点がなく、彼らが何を考えていたのかを知る機会もあまりなかった。もっとも、ここ数年は、小杉亮子『東大闘争の語り』（新曜社、2018年）に民青系の人たちの語りが多数収録されているのを読んだり、それと前後して、川上徹、大窪一志、伊藤谷生といった人たちの著作に接することによって、彼らのことも多少分かるようになってきた。その多くは東大闘争後まもない1970年代初頭に党中央と衝突して離反もしくは追放されたようだ（いわゆる新日和見主義事件）が、この本の著者は新日和見主義事件に「奇跡的に連座しなかった」とのことで、その後も長く党内にとどまっていたらしい（1985年に離党）。私自身は詳しい事情を推測できる立場にはないが、間接的に聞き知る情報からすると、かなり遅い時期まで党内にとどまって1980-90年代に離党した人も結構いるみたいなので、これはこれでそれなりに大きな流れだったのだろう。

本書の大きな特徴は、文学部のストライキ解除のために、林健太郎およびその後任たる岩崎武雄の両文学部長と水面下で交渉したほか、宇野精一、相良亨、斎藤忍随、山本信等々の文学部教官たちや尾崎盛光（文学部事務長）と密接に接した裏話を実名で書いている点にある。学生側については、「有志連合」（それまで政治にタッチしておらず、ストライキ解除の一点で民青と手を組んだらしい）に属した学生として、桃井恒和（後に読売巨人軍社長）、盛山和夫（後に東大教授）、神野志隆光（後に東大教授）といった人たちとの接触が述べられ、革マル活動家の加藤という人とも会ったことが記されている（東大闘争時とは別だが、駒場寮時代の友人として佐々木毅の名も出てくる）。宮本顕治から直々の指導があったことも詳しく記され、「大学の自治の範囲では到底処理出来なくなった場合は、警察力を大学に導入して過激派に対処することもありうる。敵をして敵を打つのだ」と言われたという。著者は後に宮本の指導に疑問をいだくようになってきたらしいが、このときはこういう宮本の言葉を「柔軟な発想」と感心したとのこと。彼自身、ストライキ解除のためには、「ノンポリの学生はもちろん、保守系の学生や右翼的な学生とも団結しなければ解決出来ない場合もある」と考えていたようだ。

こうした紹介の仕方にはやや意地悪いニュアンスが含まれてしまったかもしれないが、それは本意ではない。かつて彼らと敵対関係にあったことは事実だし、その後もかなり長いこと心理的わだかまりがあったが、半世紀を過ぎた今となっては恩讐の彼方という気がしている。本書の記述がどこまで正確なのかは、他の諸資料と付き合わせて批判的に検証しなくてはならないが、とにかく一つの興味深い証言ではある。

20200530

歴史を見る眼と現代を見る眼。

私はこの間ずっとソ連末期の「ペレストロイカ」の過程について研究しているが、その中で一つ思うのは、同時代的に観察していたときにいただいていた感覚と年月をかけて歴史研究を積み重ねる中でいただくようになった感覚の間に微妙なずれがあるということである。たとえば、当時「保守派」というレッテルを貼られていた人たちはどうしようもない頑迷固陋な反動というイメージがあったが、そういう人たちの発言を丁寧に読むと、賛否は別としてそれなりに筋の通った論理を見出すことがある。他方、「民主派」「改革派」と呼ばれていた人たちは、当時は強く共感し、拍手喝采する対象だったが、彼らの発言をいま読むと、あまり感心しないものを見出すこともある。だからといって、かつてと評価をすっかり逆転させて、「民主派」を否定して「保守派」を肯定する立場に移行するというわけではない。ただとにかく、大まかな立場性と具体的な個々の言動の関係がそれほど単純一筋縄ではないことに気づかされる。

さて、今日、誰も彼もがコロナ禍についていろんな発信をしている情勢を観察すると、これと似たような現象にぶつかる。一方では、日頃わりと好感をいただき、「この人のいうことは傾聴に値する」と思っている人たちの発信の中に安易な決めつけやセンセーショナルリズムが多くて、がっかりさせられることがあり、他方では、日頃あまり親近感のない人の発信に「これはまともだ」と感じさせられることがある。だからといって、今までの見方をすっかり逆転させようと思うわけでもないが、ただとにかく立場性と個々の発信への評価とは一義的に対応しないことを痛感する。

このこと自体は当たり前のことかもしれない。ただ今回の場合、どちらかというところ「仲間だ」「応援したい」と考えたい人たちの発信に幻滅させられることが特に多く、暗い気持ち誘われる。

20200608

大野光明・小杉亮子・松井隆志編『社会運動史』第2号（「1968」を編み直す）新曜社、2020年という本を読んだ。収録されている多数の文章のうち、直接的な意味で私の関心に近いのは小杉亮子論文、山本義隆論文、古賀暹インタビュー、富田武論文、加藤一夫インタビューあたりだが、それ以外のものも含めて、全体を面白く読んだ。冒頭におかれた編者はしがきに、「これらの論考や語りの対象や立脚点はさまざまであり、本特集は一つの「1968」像を提示するものではない」とある。実際、それぞれの文章の主題も視角や論じ方も多様であり、何かまとまったイメージを与えるものではない。そのこと自体は当然であり、編者たちの意図通りでもあるだろうが、では編者たちはそうした多様性をどのように受け止めようとしているのだろうかという疑問が浮かぶ。

この点で参考になるのは、この号の準備過程で行なわれた3人の編者の座談会である（『週刊読書人』2019年9月27日号）。そこでは、社会運動史を研究することの意義について、編者たちの間に微妙に異なった力点の置き方があることが触れられている。私流にまとめさせてもらうなら、①「正の教訓」を汲み出し、それを現在の運動に役立てる、②「負の経験」に着目し、それを「反面教師」として現在の運動への教訓とする、③直接的

な意味での現在への教訓を追い求めるのではなく、正・負双方の——また一概に正とも負とも言い切れない要素も多々ある——諸側面の全体を理解しようと努め、そのことにより過去の人々の生き方や感性への想像力を養う、ということになるだろうか。私の場合、かつて自分の関与した運動には、第三者的に言えば様々な側面があるとは思いますが、自分自身の関心としては、どちらかというところ「負の経験」を見据えることに心が引かれる。その意味では②に近いところがあるが、そこから現在への教訓を引き出すという作業はそう簡単にはできそうにない。それは誰か他の人たちに委ねることとして、むしろ「よかれ悪しかれ現にあった一つの経験」として記録にとどめることに重点をおきたいという感覚があり、その意味では③が相対的に近いように感じる。

20200621

昨日、東欧史研究会のオンライン方式シンポジウム「近現代の中東欧における Populus をめぐって」に参加した。3本の報告および報告者たちによる座談会（参加者たちからの質問への回答を含む）という構成。報告者名および報告タイトルは次の通り。

- ・井出匠「世紀転換期北部ハンガリーにおける人民党運動と"lud"」。
- ・中田瑞穂「人民民主主義・民主主義・ポピュリズム——チェコスロヴァキアの1940年代」。
- ・水野博子「人民をめぐるイデオロギー闘争——オーストリアを例に」。

どれも私の予備知識の乏しいテーマだが、それぞれに充実した報告で、勉強になった。井出報告はカトリック人民党とスロヴァキア人民党という二つの政党（後者はその後、ナチ時代の「独立スロヴァキア共和国」の政権党となる）を取り上げていたが、両者は多くの共通点および継承関係を持ちながらも微妙な差異もあつたらしい点が興味深かった。中田報告と水野報告はともに第二次世界大戦後初期の流動的な状況を取り上げ、共産党、社民党（右派と左派）、その他の諸政党の「人民」観および相互関係を論じるという共通性があったが、チェコスロヴァキアとオーストリアの違いも大きかつたらしい点に関心を引かれた。それ以外の諸国も含めてこの時期の諸政党関係を比較の視野で論じたら興味深いものになるだろうと感じた。なお、東欧史研究会の企画なので、ロシア・ソ連史で類似の問題を考えるとどうなるかという問いは直接には立てられなかったが、ソ連との関係が陰に陽に意識されている以上、そうした観点からの討論も今後は必要とされるだろう。

話をもっと広げるなら、一つには概念史的関心から、英語、ドイツ語、チェコ語、スロヴァキア語、ハンガリー語、ロシア語等々で「人民」ないし関連の諸概念がどのように言い表わされてきたのかという問題があり、もう一つには政治史的な関心から、「自分たちこそは真の人民の代表者だ」「人民とは本来一体のものであり、その一体性を掘り崩すような連中は「人民の敵」だ」といった観念をいなく政治勢力（今日的にはポピュリストと呼ばれる）が有力になるのはどういう状況であり、その帰趨はどうなるのかといった問題が思い浮かぶ。もちろん、これはあまりにも大きすぎる問題で、シンポジウムそれ自体の枠をはみ出すが、とにかくそういう大問題まで考えさせるという点で有意義な企画だった。

20200625

BlackLivesMatter.

この英語の訳し方にはいくつかのものがある。「黒人の命は大事だ」「黒人の命も大事だ」「黒人の命こそ大事だ」等々。どれも理由があって考案された訳だが、それぞれに批判もあり、論争的なようだ。そういう中で、ピーター・バラカンが「黒人の命を軽く見るな」と訳したという話を新聞で読んだ。これは流石だと感じ、思わず唸らされた。その後、「黒人の命を粗末にするな」という竹沢泰子訳があるのを知った。バラカン訳と竹沢訳はともに原文の主語・述語関係にこだわらないということと、肯定文を否定形の命令文に置き換えて訳するという共通性がある。英文和訳は得てして原文の文法構造にこだわるあまり、原文のニュアンスをうまく伝えないことがある。この点、バラカン訳と竹沢訳は敢えて英語の文法構造から離れることでかえってよく趣旨を伝えているように思う。

20200628

昨日は、早稲田大学シヨナリズム・エスニシティ研究所(WINE)の緊急オンライン対談「新型コロナウイルス感染症と国民国家／ナショナリズム」という企画を聴講した（同じ時間帯に、ユーラシア研究所の企画（ロシア憲法改正に関するもの）がやはりオンライン方式であり、かけもちしようかとも思ったが、結局、早稲田の企画のみを聴講した）。報告は次の通り。

- ・中澤達哉・WINE 所長による問題提起「新型コロナウイルスの副作用としてのナショナリズム」。
- ・池田嘉郎「コロナ禍の中の現代国民国家」。
- ・加藤陽子「コロナ禍の世界が映し出した「神なき国」の近代と「社会」」。
- ・富士由紀「中国の感染症とナショナリズム」。
- ・小沢弘明「新自由主義下の COVID-19」。

どれも盛りだくさんな内容で、それぞれに興味深い重要論点を多数並べ、しかもそうしたものが 5 本も並ぶと、「欲張りすぎ」との観もあり、集中的な討論に適さないのではないかという気もした（チャットを利用した質問を出すこともできたのだが、私はあまりにも分散した議論にどう切り込むのが適切なのか考えあぐね、質問を出さなかった。その場で提出された質問をホストがまとめて紹介していたが、その多くは具体的な論点に即した質問というよりも自説の提起であり、ただでさえ多すぎる論点を更に増やすもののように思えた）。

中澤報告と池田報告とは呼応するところがあるような気がしたが、時間的には歴史と現在にまたがり、空間的には世界各国にわたって、多様な論点を挙げるもので、おそらく研究報告としては 10 本とか数十本に匹敵するだろう。それを 15 分以内にまとめるというのは大変な力業だが、聞く方としては、「どれも大切でしょうが、それぞれについてどう考えていこうとするのでしょうか」という以上の感想を出す余地がない気がした。

加藤報告と富士報告はそれぞれ日本と中国に特化するもの。加藤報告のレジュメには興味深そうな項目がいくつも挙げられていて、大きな期待をいだかされたが、時間配分がうまくいかなかったのか、多くの重要項目が十分展開されないままに時間切れとなったという印象があった。富士報告は大半の時間を過去 100 年ほどの歴史にあって、最後のあたりで現状を取り上げたが、その落差の大きさに印象づけられた。

小澤報告は報告者の年来の問題意識に基づいて独自の新自由主義論を展開した。これは

これで重要な問題提起だとは思いますが、こうした設定だとコロナ禍は単なるダシのような位置におかれてしまうのではないかと、またここでいう「新自由主義」なるものはあまりにも使い勝手がよすぎて、何もかもを説明してしまうマジックワードのようなものになってしまいはしないかという疑問をいただいた。

司会の中澤氏は、「これをシンポジウムと銘打とうかという考えもあったが、そうはせず、対談会ということにした」というようなことを述べていた。どういう趣旨なのか十分よく飲み込めなかったが、私としては「これはブレーン・ストーミングではないか」という感想をいただいた。各人各様に雑多な議論を出し合うのを聞いているうちに、頭の中で台風のような渦が巻き起こり、これから先いろんなことを考えたり討論していこうという気持ちを引き起こされる。そういう「ストーミング」が狙いだとしたら、これはこれで有意義だったのだろう。

たくさんの発言の中で一つ記憶に残っているものとして、加藤陽子氏の「いま巢ごもり日誌を付けている」という言葉があった。歴史家というのは、直接の主題としては現在とか未来とかよりも過去に目を向ける稼業だが、その作業が現代的状況の中で行なわれる以上、目前で進行しつつある大変動に目を凝らし、その観察記録を日誌に書き記すのは当然のことだろう。数年後にそうした日誌が公開されるなら、それは将来の歴史家のための貴重な素材となるだろう。